平成三十年四月十日発行
皇學館論叢第五十一巻第二号　抜刷

丹羽文雄「親鸞」にみる人間性

――親鸞の人間愛を中心に――

河合重好

皇學館論叢　第五十一巻第二号
平成三十年四月十日

丹羽文雄「親鸞」にみる人間性

――親鸞の人間愛を中心に――

河合重好

□ 要　旨

丹羽文雄（以下丹羽と表記する）は、「親鸞」の創作意図について、この作品は親鸞の人間性を追求することを主眼としたものであると語っている。本稿は、その具体的描写を検索したものであり、丹羽は、前段において、人間性を否定する戒律への反発、歎異抄での親鸞の言説から読みとれる万人平等の人間観、さらに、師、法然に対する絶対帰依といった事柄を対象とし、さらに、後段において、三〇年前に離別した長子善鸞を宗教者として育てるための父親としての心配りなどを通して親鸞の人間性を語っている。そして、最後に、親鸞の名代として東国に下向した善鸞の布教活動、そこに展開される親鸞、善鸞そして東国の門徒たちの人間性を背景とした三者間の信仰上の葛藤や苦悩の中での人間模様を描写しており、ここには、長子善鸞が、親鸞からの真宗伝授を強く望みながらも、教化が進むにつれ、求道姿勢の違いから次第に離反していき、その背信行為によって、ついには、親鸞から義絶を言いわたされる姿が描かれている。

□ キーワード

親鸞の人間性　戒律への反発　歎異抄　善鸞の布教

まえがき

丹羽の宗教小説の集大成といわれる大作には、親鸞の一代記ともいえる「親鸞」があり、その構成は、親鸞の幼少期から、最晩年に至る全生涯を対象に展開されている。この作品は、昭和四〇年九月十四日～四四年三月三一日の間、足かけ五年間にわたり『産経新聞』に掲載され、後に、昭和四四年五月～九月の間、新潮社から五巻本として、刊行された百万字を超える長篇小説である。丹羽は、この作品の執筆意図について、五巻本の最後のあとがきで、「私は歴史家ではない。宗教学者でもない。人間性を追究することを仕事の場としている文学者にすぎない。この長篇で私は可能なかぎり親鸞の人間性を追求したつもりである」と述べており、また、「親鸞」を書き終えた直後、東京新聞（昭和四四年七月五日）においても、同様の見解を表明している。

親鸞を信仰的に描くのではなく、ひとりの人間としてどう生きてきたかということを平安朝から鎌倉幕府の激動する時代の中でとらえたいと思った。長子善鸞（第一夫人承子との子、のちに、信仰上の裏切りから義絶）の問題がこれまでの親鸞物ではおざなりにされてきた。私は親鸞の人間性をたよりにして書きつづけた。

と語り、さらに、丹羽の親鸞思想への接近がどのようなものであったかについては、「あとがき」で、次のように述べている。

私の書庫は、親鸞に関係する書物で埋まるようになった。他の書物は別の場所に移した。夜更けまで私が読書していることがあれば、それは親鸞に関係した書物に向かっているときであり、飢えた人のようであった。

と供述し、徹底した親鸞思想への共鳴と接近を告白しており、丹羽の親鸞思想への造詣の深さを想像することができる。

親鸞と丹羽の生誕年には七〇〇年以上の開きがあるが、作品には、随所に、自問自答型や会話体の文体で描写されており、臨場感溢れる表現となっている。

なお、作中での親鸞の言説については、史実にもとづく親鸞本人のものと丹羽が親鸞の名に託して創作したものがあるが、歎異抄以外は、すべて後者であることを付記しておきたい。

ここには、厖大な資料（この作品の「あとがき」で、丹羽は、親鸞思想はもとより、『日本仏教史』、『中世思想史』、『親鸞と東国農民』など、五二本に及ぶ書物をリストアップし、謝意を表している）から、習得した豊かな知見をもとに、末法の時代といわれる中世の激動期に、親鸞がどのように生きたか、また生きざるをえなかったかという親鸞の歩んだ道に焦点を当て、丹羽の豊かな文筆能力を縦横に駆使して、この作品は創作されている。

本稿は、丹羽が、この作品は「親鸞の人間性を追求することを主題としたものである」と語っていることから、その意図が作品の描写にどのように展開されているか、またそれによって、読者に何を訴えようとしているのかを明らかにすることを目的としたものである。

一　戒律（女犯）への反発

仏教の大衆化への濫觴となった法然の『選択本願念仏集』の特徴について、田丸徳善は、次のように述べている。(1)

仏教のめざす生死からの解脱にいたるには、聖道門と浄土門との「二種の勝法」がある。聖道とは、この現実世界の中で努力をかさねて、悟りをひらく方法である。これに反し、ただ佛を信じ、その力をたのんで、浄土という佛の国に往生することを願うのが、易行道すなわち浄土門である。

法然が、『選択本願念仏集』で提唱した浄土門は、既成教団の主流からはずれ、またはその枠の外にある人びとを対象とした。もちろん、現世の身分は、しょせん相対的なものとされたが、修行ではなく、念佛によってのみ救われるとの教えは、職業的僧侶たちよりも、むしろ「尼入道の無知のともがら」に、より受け容れられやすかったであろう。この点で、それは一般在俗者の宗教となる素地をもっていた。

このように、この時代は、一部の修行僧を対象とした、戒律を重視する聖道門と一般大衆を対象とした浄土門の大きな二つの求道の道があった。両者は、互いに対立し、葛藤や相克を繰り返していた。

このようななか、丹羽は、法然を師と仰ぎ、浄土門に身をおき、肉食妻帯を行った親鸞の生き方に共鳴する立場に立ち、第二巻「六角堂参籠」の章で、聖道門では、女人に近づくことを罪悪とする修行のあり方について、そのような仏の教えに対する根源的な疑問と反発を次のように述べている。

女人を避けるということは、種族の保存という本能的なはたらきを根本から否定することであり、仏は人間に何を求めているのか。人間の絶滅を仏は理想としているのか。仏の教えは、人間が根本悪の罪業観から、いかにしてのがれるか、愛欲にしずむ人間の罪業をあてにしているのではないか。（中略）

そのため修行僧の訓戒の第一条件に、女犯があげられるのは、本末転倒であり、滑稽ないましめだと範宴（後の親鸞）は考える。仏は、人間を救うものである。人間が根本的に蔵している罪悪によって、仏に救われることになるのだ。仏の目からみれば、女も男もない。たとえ一生不犯で終ろうとも、その僧の名誉欲、権勢欲、物質欲が不問に付せられてよいという理由にはならないだろう。（中略）

愛欲にしずむ人間の罪悪は、人間そのものから切りはなすことは出来ないものだ。子を産むことは、種族の保存であって、そのことがただちに罪悪といえないまでも、そのことは人間の根本悪につながっているのである。

人間はそもそも、強靭な根本悪によって、たくましく生きているものではないか。その罪業ゆえに、仏が必要であり、仏が存在するのだ。（中略）

それを人間が、小賢しく、清聖なる名のもとに、おのれの根本悪をおのれの手で一掃出来ると思い上がっていることになる。しかし、それも清聖という美名のもとにまどわされる形式主義と思えば、責めるのも気の毒であった。（中略）

愛欲の中にあって、その解決手段を見出さないかぎり、根本的な解決とはなりえないのである。誇張していえば、女犯の経験をもたない仏教者的修行が、はたしてどこまで生きている人間を理解することができるのか。女犯の経験をもたない高僧が、人間についてどのような深遠な教義や教訓をたれたところで、それは結局女犯の経験のないひとの説にすぎないのである。

と述べ、丹羽は、煩悩を発露とする愛欲の世界があるからこそ、仏の存在価値があると強調している。

二　万人平等の人間観

丹羽は、親鸞の人間性を読みとることができる最も象徴的な言動として、身分の上下を越えた平等観を挙げ、第三巻「運命の出会い」の章において、越後に流罪となった親鸞が、貧しく、牛馬同様の扱いを受けて来た農民たちを相手に「人間は、すべて平等である」と、親鸞の法話の形で、次のように述べている。

「お前さんたちも、この私も、国守も、三善為教も、名主の家族も、みんなおなじ人間だ。京都のえらいひとびとも、鎌倉の将軍ですら、私たちとおなじ人間である。仏さまの目には、区別がないのだよ。仏の目からみた

ら、みんなおなじ人間だ。（中略）法然上人ですら、仏の前に坐ったときには、弟子の私とおなじになるのだ。私とお前さんたちとは、何の区別もないのだよ」

丹羽が、このような平等観を述べている背景には、親鸞の人間性に通底していると考えられる歎異抄[2]の第五章（父母孝養）、および第六章（弟子ひとりももたずさふろう）の二章での文言が密接に関係していると推察される。

先ず、第五章の、「親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念佛まふしたることいまだ候はず」という文言に対して、真継伸彦は、次のように、血脈や人脈を超越した、万人に対する他力救済の平等観が示されていると注釈している[3]。

親鸞は父母の追善供養のためといって、まだ一度も念仏したことはない。その理由は、生きとし生けるものすべてが、これまで無限に生きかわり死にかわりしてきた私たちの父母であり、兄弟であるゆえである。（以下略）

と、語っている。

次に、第六章の、「親鸞は弟子一人持たず候」という文言に対しては、真継は、次のように注釈している[4]。

親鸞は弟子を一人も持っておらぬ。その理由は、親鸞の意向で人に念仏を申させるのであればこそ、弟子でありうる。ひたすら弥陀のおんうながしにあずかって念仏申しておられる人を、自分の弟子というのは、きわめてすざまじい言い分である。（中略）如来よりたまわった信心を、我物顔して取り返そうというのであろうか。くれぐれもあってはならぬことである。

と述べ、他力信仰を標榜する親鸞にとっては、弥陀の前では、すべての人間には上下の関係は存在せず、平等であると語っている。

このような万人平等を説く、親鸞の人間性に対して、丹羽は、第五巻「日蓮」の章で、親鸞と同時代を生きた、日

蓮の生き方を引用し、対照的な親鸞の生き方を述べている。

日蓮には、師の意識が強烈であった。日蓮は日本人の魂也、我日本の眼目とならん、我日本の大船とならんと、その意気の熱烈なことは、師という意識から発せられるものであった。親鸞はどのような念仏者に対しても、同行であり、同朋であった。親鸞には師の意識がひとかけらもなかった。親鸞は弟子ひとりももたず候であった。（中略）

親鸞は、寺を建てなかった。自分はあくまでよきひとの仰せを守っているだけだといい、おのれを主張しなかった。そして、名もなき百姓、下人、猟師、女たちのひとりひとりの胸に親鸞教をうえつけた。おのずと組織化されていく東国の各教団に対して、親鸞は単純によろこんでいたのではなかった。親鸞が生涯を通じて行なってきたことは、自らも信じ、ひとを教えて信じさせるということ以外に何もなかった。信者を組織化するなど思いもよらなかった。

三　法然への帰依

次に、丹羽は、歎異抄第二章の法然への帰依について、第四巻「方便」の章で、盲信的ともいえる親鸞の生き方に対し、次のように述べている。

法然偏依が、親鸞の廻心のきっかけであった。純粋な帰依、一途な信従、法然との邂逅の謝念がその廻心を歴史的なものとした。そこから親鸞の求道は、より深く、よりはげしく発展していった。

「念仏は、まことに浄土にうまるるたねにてやはんべるらん、また、地獄にをつべき業にてやはんべるら

ん……」

そのようなことを自分は知らない。たとえ法然にだまされて、念仏して地獄におちたとしても、さらに後悔することではないと、これほどの帰依が出来たということは、尋常の信徒ではない。そのはげしさ、純粋さ、一途さ、たくましさこそ、親鸞なればこそ可能であった。親鸞の人間性を、あますところなくあらわしていた。と、たとえ地獄におちても後悔しないという絶対的な法然への信頼を通して、親鸞の人間性を語っている。

四　教義の伝授を通しての父子の対話と乖離

（一）再会までの経緯

先ず、丹羽は、第四巻「帰京」、「京の日々」の章で語られている父子の再会に至る経緯について、次のように述べている。

長子善鸞は、親鸞の第一夫人（のちに、死別）であった承子との間に生まれた息子であり、親鸞にとっては、第一子であるが、親鸞の越後遠流や、その後の東国暮らしに伴い、善鸞は、実母（承子）とともに、京都に残り、幼いころ、親鸞とは、生き別れになった経緯をもっている。

一方、ここに至る親鸞の足取りを辿ってみると、幼少期を養父に育てられた親鸞は、九歳で比叡山に出家し、そこで二〇年間過ごし、さらに、六年間、法然門下で修行を積んだ時、法難に会って、越後に流罪となった。そこで、第二夫人筑前（後の恵信尼）と再婚した親鸞は、妻、息子二人（信連、道性）、娘三人（末っ子が玉御前、後に、真宗を継承する覚信尼）を伴い、長い越後や東国での生活を終え、六三歳になって、京都に帰ってくる。そして、善鸞とは二九

年ぶりに再会することとなる。善鸞は、すでに一家を構え、妻宮城と幼子如信の三人家族となっており、本人は、呪文や祈祷を重視する天台系の西王寺の堂僧となり、何年も護摩を焚いてきたという。再会した親鸞が善鸞から受けた第一印象について、次のように語っている。

親子の対面を通して、親鸞は善鸞が僧としての勉学や修行よりも単なる生活者としての人生を送ってきたことに気付く。そのため、わが子には、浄土宗のいろはを教えなければならないと決意し……、

ここで、丹羽は、親鸞が二九年ぶりに再会した僧としてのわが子の未熟さを目の当たりにし、血を分けた父子間の情愛を背景に、子の成長を願う父親の率直な気持を述べている。

（二）伝授を通しての人間交流

次に、丹羽は、父子間の人間交流について、次のように述べている。

第四巻「帰京」の章で、再会後の伝授の手始めとして、親鸞は、釈迦の教法を説く大蔵経の諸経典について、現在では、諸説があるため、どの経典が本当の釈迦の説かわからなくなってしまっているという話から始める。

それに対し、善鸞は、「そういう話を、私はこれまで一度も聞いたことがありません」といった態度で、傾聴する姿が描かれている。

この後、親鸞の話題は、聖道門と浄土門の違い、天台宗と真言宗の区別、さらに禅宗が武家好みの宗教になったこと等を語り、自分の体験を話す。

「私は叡山に上り、ながい修行の年月を経験した。自力聖道門の修行で苦しんだ期間は、私にとっては実に意義のあることだと思っている。それは私にとって、絶対に必要な期間でもあったのだ。その修行の中で、この親

鸞はおのれが無能、無力、罪悪深重、煩悩具足の凡夫にすぎないことを、たたきのめされるように知ったのだ」

親鸞のことばには、しみじみとひびきがあった。

ここで、丹羽は、親鸞の九歳から二九歳までの二〇年間の聖道門での修行を貴重な体験であったと語っている。

それを善鸞がどのようにうけ取ったか。

「あらためて父上から教えをうけたいと思います。西大寺の方はひとまず暇をとるつもりです。何もわからない人間です。信蓮坊、道性房（第二夫人との二人の息子）からも教えていただかねばなりません」

と述べ、初心にかえって、伝授を受ける決意を表明する。

これに対して、親鸞は、次のように助言する。

「東国から追々ひともやって来るであろうが、父が客と話をしているとき、出来るだけそばで聞いているがよい。疑いがあるときは、どんなことでもこの父に訊くがよい。疑うことは、すこしも恥ずかしいことではない」

「はい」と答え、善鸞は、「これから何を勉学すればよいでしょうか」と問う。

「浄土三部経を学ぶがよい。ひととおり三部経が読めるようになるとよい、信蓮坊か道性房が教えてくれるであろう。善鸞房は托鉢に出かけることもあるといっていたが、信蓮房たちも托鉢に出かけている。それも僧であることの修行の内だから」

と、ここにも、丹羽は、親鸞をやさしい人柄の人物として描写している。

さらに、善鸞の「この家には、仏壇もありませんが……？」という問いに対して、

親鸞は苦笑して、「そのわけは、いまにわかる。六字の名号がある。それだけでたくさんのわけが、追々そなたにも理解されるであろう」

と述べ、仏は光、光は知恵として、形はなく、木像より画像、画像より名号を標榜する親鸞の根本思想の一端を示し、ここにも、丹羽は、外見的な仏像信仰を否定し、心の内面を重視する親鸞の人間性を語っている。

そして、親鸞は、善鸞に対して、大無量寿経の四十八願や三願転入に関する伝授を、かき口説くように教える。教えを受けながら、善鸞は、その印象を次のように妻に語る。

「父は大無量寿経の四十八願を、いちいち噛んでふくめるように教えてくれる。父の三願転入の道筋は、理解出来る。しかし、それは父が何十年もかかって、苦悩と体験を通じてようやく知ったものである。父の説明は、そのかぎりにおいては、私にもよくわかる。しかし、私のわかり方と父の発見とは、大へんなちがいがあるのだ。そのところを父はうまく理解してくれないようだ」

と述べ、親鸞との間に、埋めがたい溝があり、信仰上の真意を理解することの至難性を通して、丹羽は、人生経験の違いが、双方の意思の疎通に、大きな障害になることを描写している。

さらに、第四巻「方便」の章でも、父からの伝授に対する善鸞の率直な気持を次のように語っている。

「正直なところ、浄土真宗の教えは、あまり単純であり、安易なような気がして、疑いばかりが生じます。そんなことで人間が救われるものかと不安になります。しかし、仏は念仏する衆生を摂取して捨てまいと誓いをたてられているかぎり、人間は救われるのでしょう。疑うたびに、心をあらたにして、廻心しなければならないと思います。私としましては、朝に晩に廻心して、往生をとげるべきものと考えます。廻心もせず、心おだやかになっていないときに死に見舞われては、せっかくの仏の誓願も無駄になってしまいましょう」

これに対して、親鸞は、わが子を哀れに思った。たれよりも親鸞の教えを正しく、すなおに理解するはずの善鸞が判ってくれないのである。親鸞は焦燥をおぼえた。わが子ひとりが教えられないのである。親鸞は、わが子

の頭を疑っていなかった。善鸞は才能のある人間である。（中略）善鸞の心に最初におとずれたのが天台の教義であった。それによって善鸞は、目をあけられた。が、それは親鸞のようなはげしい求道心の結果ではなかった。

善鸞が天台系の西大寺の堂僧となったのは、世間によくある生活のためであった。決して求道精神のためではなかった。

親鸞は法然の弟子となったそのときから、廻心生活にはいった。が、善鸞はちがう。切実な求道精神が、その前提となっていたというのではない。そこに親鸞と善鸞の決定的な相違があった。

と述べ、体験に拠らない口頭伝授の限界から生ずる善鸞への失望感と己の無力感を痛切に感じる姿勢が語られている。

ここで、「廻心」と「改心」の違いについて、落胆した親鸞が、善鸞に説く姿が、次のように、語られている。

「廻心」とは、善心とか清浄心というようなものは、もともと持ちあわせていない煩悩具足の凡夫を対象にしたものであり、凡夫は、善悪のけじめさえのみこめていないのだ。改めようがないのである。その凡夫の出来ることは、改心ではなく廻心である。改めるのでなく、向け直すのである。凡夫のままで、仏の道をあゆむことであり、「廻心とは、ただひとたびであるが、それは無限につづくものだ。朝に夕に廻心をするというものではない。そなたの生活全体が、廻心の生活でなければならないのだ。二回とか三回とか、決定的廻心などあろうはずがない。ひとたび廻心の生活にはいれば、たとえそのひとが重い病気になって、臨終に念仏がとなえられなくとも、立派に摂取されるのだ。廻心の生活にはいれば、生活全体が廻心によってつらぬかれていることになる。おだやかな気持でいられるはずだ」

と述べ、廻心は回数で扱うものではなく、持続的な信心生活のことであると説いている。

（三）　善鸞の東国下向と義絶

丹羽は、京都に戻った親鸞の生活について、善鸞と交流しながら、『教行信証』や『正像末和讃』といった著述に精進していたと述べている。

一方、主なき東国では、一〇年、二〇年経過するうちに、京都の親鸞とは、文通を通じて布教されてはいたが、この方法は、説得力の点で、対面による法話には及ばないため、次第に、多勢の門弟のなかには親鸞の説いた信仰と違ったものが台頭し、多くの異説が流行するようになり、相争う姿が目立つようになった。親鸞は、このような混乱を収拾させるため、善鸞を、親鸞帰京後、二〇年経った一二五三年、親鸞（八〇歳）の名代として、東国に派遣することにした。

しかし、東国では、すでに強力な教団体制が形成されており、親鸞の名代として、東国の諸教団の首領となる計画は、正面から反発を受け、挫折することになる。

このときの東国の信徒たちの拒絶観と善鸞の動揺を、第五巻「善鸞の悲劇」の章で、丹羽は、次のように語っている。

東国に来てみると、東国の教団は京都の親鸞を背景としながらも、一念か多念か、有念か無念かといった諍論が繰り返される中で、それぞれ独自の分派を形成しながら、門弟たちによって統一が保たれていた。造悪無碍の輩に対する非難や、そのための念仏弾圧はつづけられていたが、それにもかかわらず地を這うようにして根強く念仏信仰は保たれていた。親鸞が京都にひきあげてから二〇年の歳月が経っていたが、念仏の教団は隠然たる勢力をもっていた。その勢力の強靭さは、善鸞の予想を裏切った。善鸞には歯がたたなかった。名代としては一応の敬意を表するが、結局善鸞は親鸞でないという一線を、どの教団も暗に善鸞に知らせることになった。親鸞の長男であろうと、名代であろうと、親鸞の教えに対しては平等であるという態度であった。いまさら善鸞に歩き

まわられては迷惑であった。

といって、善鸞が親鸞を背景とせずに、かれらと思想上で争うことは不可能であった。親鸞の長男であることをふりまわしたところで、かれらは善鸞を自分らより上の人間としてはみとめていないのである。善鸞の胸中には、さまざまな不純な意志が錯綜するようになった。善鸞は、かれらに屈服したくなかった。無用な名代扱いをされることにたえがたかった。

これがきっかけとなって、善鸞は、名代としての道に絶望し、もともと親鸞思想に、半信半疑であったことも背景となり、東国（武蔵）を発祥の地として流布していた立川流に傾斜していくことになる。この宗派は、かつて自分がはじめて、宗教への接点として、洗礼を受けた真言密教の一派であり、陰陽道と民俗信仰との合体でできたものであった。

このときの、善鸞の信仰心の動きと親鸞思想への違和感について、丹羽は次のように述べている。

善鸞は、東国における民間信仰や、修験道や陰陽道と妥協して、現世祈祷（親鸞が最も忌避したもの）を行うようになった。そのことは親鸞の教化とかけはなれたものであり、父親鸞の教義を不純ならしめるものであった。善鸞は三道合法（仏、神、道もしくは、儒のまざりあったもの）の思想をもって、念仏の意義を解釈していたのである。

親鸞は、如来の大行に絶対唯一の真実をみとめた。この絶対真実に照らされるとき、相対の真実は一切がそらごとたわごとであると同時に、その一切はそのまま真実の大行に帰入されるべきものであった。が、善鸞の場合は、密教思想とおなじように相対の一切の上に直ちに真実をみとめようとしたもののようである。善鸞は南無阿弥陀仏だけで救われるという父親鸞の信仰を理解することが出来なかった。（中略）善鸞の胸の底では、二〇年近くも父のそばにいて、如来の本願をききながら、念仏ひとつだけということが納得できなかった。父の信仰を

危険視する気持は払拭出来なかった。不安であり、はらの底からついていけなかったものである。

と述べ、親鸞思想に順応していけない善鸞の疎外感が語られている。[5] そして、立川流に接近し、同化していく善鸞の姿を次のように語っている。

善鸞の住居には、立川流の行者がたえず出入りしていた。善鸞は念仏を称えていたが、行者の話には耳を傾けた。行者は善鸞に気に入られていることを心得ていた。

善鸞は行者によって三道合法を教えられた。皮肉なことに、親鸞の口から語られる念仏よりも、行者の語る立川流の法門の方が納得出来た。それには天台宗の素養があったからというだけでなく、善鸞の性格がそれに向いていたのである。

良時吉日をえらんだり、卜占祭祀をし、天地の鬼神をあがめることに善鸞は意義を感じていた。二十年近くも父親のもとで、たえず仏の本願を聞かされてきたが、善鸞には深いところにたどりつけなかった。父の教えが、不安でならなかった。（中略）父親鸞の教義は、罪悪を否定するにも非ず、肯定するにも非ずといった態度であった。口を開けば、如来の本願が一切の罪悪を包容するという。善鸞には父のように一切を如来に任せることが出来なかった。肯定か、否定であった。善鸞には父のような信仰に徹することが出来なかった。

善鸞は親鸞の教えを相続することが出来ず、立川流の邪義に走った。台密の素養のあった善鸞にははいりやすかった。

ここで、丹羽は、信仰上の決定的な父子間の断絶を述べており、その原因の一例として、次のような親鸞思想の特異性を語っている。特に注目したいのは、善と悪に関する信仰観の違いであり、一般に、仏教では善と悪を対立概念とするのに対して、親鸞は、善も悪も、煩悩から生ずる有漏の世界のものであるとして、それを超越したところに、

救いがあると説いており、丹羽は、このような大きな違いが父子間の心の断絶に大きく作用していたと述べている。

そして、その後の東国での善鸞の布教活動を丹羽は次のように語っている。

善鸞は立川流の首領として、終りを全うした。神子巫女二、三百騎をひきいた中に善鸞が、親鸞からもらった無碍光如来の名号を首にまいていたと「敬重絵詞」にあるが、あるいは肌につけていたかも知れない。立川流はあらゆる宗教を網羅しているからである。父の書いた名号を首にまきつけていたからといって、父の教えだけを守っていたという意味にはならない。

と述べ、ここに、善鸞が多宗派を肯定する立川流に帰依し、指導的地位を獲得した生き方が描かれている。これは、明らかに、専修念仏を根本思想とする親鸞教義と根本的に乖離したものであり、親鸞に対して反旗をあげることであった。それを知った親鸞は、断腸の思いで、義絶せざるをえなくなったものとしている。

まとめ

以上、宗教小説の第一人者といわれる丹羽が、作家生活の集大成として、親鸞の人間性を追求することを主題に、発表した長編小説「親鸞」を対象として、丹羽が親鸞の人間性がどのように作品に展開しているかを、その言辞や文筆から検証した。また、親鸞と善鸞との父子間の人間交流を通して、両者の思想面での対立や乖離がどのようなものであったかについても、丹羽の描写を検索した。

その結果、前段において、戒律への強い反発や歎異抄での親鸞の言説から読みとれるように、万人平等の人間観さらには師に対する絶対帰依といった親鸞の人間性を確認することができる。

さらに、後段において、父子間の人間交流を中心に、そこに展開される親鸞、善鸞そして東国の門徒たちの人間性を背景とした三者間の信仰上の葛藤や苦悩の中での人間模様がどのようなものであったかをみることができる。ここには、親鸞からの真宗伝授を強く望みながらも、教化が進むにつれ、求道姿勢の違いや、すでに、密教思想に染まっていたことなどが災いし、善鸞は、親鸞思想への帰依には、どうすることもできない溝のあることを自覚せざるを得なくなり、次第に、批判的な立場に傾き、離反していった善鸞の心の軌跡が語られ、ついには、義絶の運命を辿らざるをえなかった姿が描かれている。

その背景には、信仰心において、何を是とし、何を非とするかは、もって生まれた資質の上に、現世での人生体験によって培われた価値観により決定され、たとえ父子間であっても、一旦形成された価値観は、容易に消滅するものではないといった丹羽独自の固定的な人間観が語られているものと思われる。

以上、丹羽が作品中で親鸞の人間性をどのように描写しているかを見てきたが、その核心となっているものは、「人間愛」であるものと判断される。しかし、宗教小説の集大成といわれるこの作品の主題として、なぜ、これを選んだかについては、その動機は語っていない。

この点は、筆者の推測の域を出ないが、おそらく、長年の作家生活で遭遇した人生の窮地において、親鸞思想が提起する人間性に、大いに救われたためではなかろうか。

たとえば、生母もの「母の日」での、他人の迷惑を顧みない生母の傍若無人な生き方から受ける苦悩が、歎異抄十三の「宿業思想」によって解放されたこと、また、真宗もの「有情」での「人間はあやまちを犯さずにはいきられない」という親鸞の和讃によって、長男直樹の国際結婚に対して、寛大になれたことなど、親鸞思想への感化が、集大成の背景になっているのではなかろうか。

ここには、望ましい人間の生き方として、平和で穏やかな社会を構築するために不可欠な、現代社会にも通じる「人間愛」を強調するとともに、全体を通して、丹羽は、親鸞の生き方に対して、かなり好意的な評価をし、かつ敬愛の念を抱いていたものと判断される。

一方、丹羽は、この点については、言及していないが、一般論として、人間性とは何かという視点にたった場合、このような固定的な概念だけでなく、善鸞が東国の門徒たちから受けた過酷な挫折や試練によっては、新しい進路への移行を余儀なくされ、その体験によって、後天的に変容し、深化していく人間性の存在も考えられることから、人間性には二面性があるのではなかろうか。

（注）

（1）竹内義範　梅原　猛編『日本の仏典』中公新書179　昭和四四年三月二五日　二〇〇～二〇二頁

（2）歎異抄

日本の宗教書の中で、道元の「正法眼蔵」とともに、二大ベストセラーといわれる「歎異抄」は、真宗八代の蓮如によって、書写されたものが、最古であり、そのもととなった唯円直筆のものは現存しない。

その内容は、宗祖の滅後、真宗教団に異義異端の徒があらわれてきたのを歎いた著者が、なおおのれの耳の底に残っている聖人の御言葉にもとづいて、その教えの概要を記したものである。だいたい、前後二部に分かれ、前半は聖人の法語を記し、後半はそのころ一部に行われていた宗義の異説を取りだして、その正しくない所以を懇切に説きあかし、もって正しい信仰に入るように勧めたものである。

著者については、内容からみて聖人の教えを直接に受けた人であることは明らかであり、現在では唯円説が、ほぼ定説に

なっている。

（平成二九年一二月二九日　同朋大学公開講座より）

（3）真継伸彦　現代語訳『親鸞全集』5　言行・伝記　法蔵館　昭和五十七年七月二十八日　一〇～一一頁

（4）（3）に同じ　一一頁

（5）この作品は、父子間の救済観の根本的な大きな違いが原因となって、両者の人間関係が破綻に至る姿が描写されているが、教義上、特に、善鸞が親鸞思想に対し順応できない苦しみや不信を抱いた箇所を、二、三挙げておきたい。

確かに、親鸞思想は、一切の戒律や修行といった苦行を必要とせず、また加持祈祷も無益であるとの立場をとっており、念仏さえ唱えれば、救われるとする救済観は一見やさしそうであるが、その神髄は、とても難解である。

たとえば、第四巻「東国の信者」の章では、道徳的価値と宗教的価値を区別する意図から、善と悪を、対立概念ではなく、いずれも煩悩から生ずるもので、有漏の世界のものとし、善と悪を超越したところを、無漏の世界として、そこに、本願があると、説明している。

また、第四巻「方便」の章では、弥陀の救いの広大さ、無限さをあらわすのに、「高僧和讃」から「念仏は、無義をもって義とす。不可称、不可説、不可思議のゆえに……」という文言を使い、言葉では説きあらわすことができないものであると語っている。

さらに、同章では、弥陀の本願に不信感をもつものに対して「本願が信じきれないからこそ、本願をたのむのである。疑いがつのるにつれて、往生はたしかなのである。疑えば疑うほど、信心がかたまる。一般の信仰条件に反した信心のつかみ方であった」と述べ、疑いがあるからこそ、救われると説明している。

これらは、親鸞思想の中核をなす、いくつかであるが、やはり、難解である。

丹羽文雄「親鸞」にみる人間性（河合）

一方、これとは対照的に、善鸞は、三道合法の思想に帰依しており、これは仏教、神道、儒教といった多宗派の信仰を肯定するものであり、戒律や修行を重要視し、かつ、密教にある加持祈祷を絶対視するものである。この思想は、知覚的体験を通して、その代償として、救いが得られるとするものであり、一般的な感情からすると、わかりやすい。

［付記］本稿での本文引用および親鸞の出自、人脈、家族構成、人名等の表記は、すべて五巻本『親鸞』各巻新潮社に依拠した。

（かわい　しげよし・皇學館大学大学院　博士後期課程）